

物語

昭和二十年夏。
日本の戦況の悪化が日増しに強くなってゆき、各地で一億玉砕が叫ばれ、最後の抵抗戦が行われていた。

そんな中、坂本光太郎と中原正人は鹿児島島の航空隊で「年ぶりに運命の再会を果たす。幼馴染みの二人だったが、正人は評判の腕のよい整備士に、光太郎は飛龍興武隊の特攻隊員となっていた。

飛龍興武隊は、アメリカ人の母を持つ天野中尉、身重の妻を持つ後藤隊長、整備不良の為何度も帰還している竹山少尉、職業野球の選手を目指していた稗田少尉と大漣少尉、写真館が実家の毛利上等飛行兵曹、物知りな文学青年の三浦上等飛行兵曹、広島出身の少年飛行兵の喜多島一等飛行兵曹、シャボン玉が好きな青木一等飛行兵曹の全10名が所属している個性的な部隊だった。

航空基地では、訓練の合間に、光太郎は正人の持っているラジオを聞いていたが、軍事ニュースに混じって坂本未来という女性が話すラジオ放送が聞こえてくる。「暴走族のカミカゼ特攻隊」の話や「ニューヨーク貿易センタービルに飛行機が突っ込んだ」など、訳の分からない内容に二人は仰天する。一体、どこからの放送なのか？ 謀略放送か？

やがて二人は、毎晩同じ時間に流れてくる不思議なその番組を聞いているうちに、その放送が未来からの電波である事に気づいていく。

そして、ラジオでは昭和二十年八月十五日、日本が負けて戦争が終わったと放送しているではないか！ もし、それが本当の話で、あと少しで日本が負けるとしたら、一体自分達は何のために今、死を選ぶのか… 特攻隊員の光太郎は悩むのだった。

誰にも相談できないまま刻一刻と時は過ぎてゆき、いよいよ光太郎たちの部隊にも特攻命令が下る。思い余った正人は光太郎の制止を振り切り、隊長たちに「未来からの電波」の事を報告するのだが……

終戦間際。

ラジオの神様が見せる奇跡の物語。

終戦間近の特攻基地。

最後の夜に神様が魅せた奇跡とは…？